

令和 4 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
指定校推薦

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

国際教養学部 小論文

問題 多和田葉子さんは将来の社会の在り方として、どのような世界を描いていますか。またあなたはそのような未来についてどのように考えますか。600字以内で述べてください。

移民夫婦の物語にみる未来（多和田葉子のベルリン通信）

今年の幕開けは、例年とはかなり違っていた。クリスマス前から都市封鎖が強化され、例年ならプレゼントを買う人で賑わう小売店もデパートもみな店を閉じていた。レストランも喫茶店も開いておらず、年末の食事会が行われることもなく、クリスマス・イヴも大人数では祝えなかった。いつもなら昼間から爆竹の音がうるさく、深夜から花火があがり続ける大晦日も、今年は花火や爆竹の販売そのものが禁止された。花火をすると怪我人が出るので病院のベッドを一つでも多くコロナ患者のためにあけておくためだったらしい。深夜十二時に家の外に出て、ワインやシャンペンで知らない人たちと乾杯することも、感染拡大の原因になりかねないので禁止された。例年なら元日の朝は花火の燃えかすや割れた瓶などで歩道がひどく汚れているのに、今年は清らかな元旦となった。

ドイツでは去年の夏くらいから、ワクチンさえできればパンデミックはやがて終わる、とそこに希望が繋がれてきた。そして十二月末によいよワクチン投与が始まると、それまではまず新しい感染者数と死者数を挙げていたラジオのニュースも、いつからか接種を受けた人の数を最初に挙げるようになった。

ワクチンの購入にあたっては、ヨーロッパ内で競争が起こるのは望ましくないのでEUで一括購入することになった。そのせいで購入が遅れるなどの問題も出てきたが、弱肉強食の競争はせずに協力し合うというヨーロッパ内の関係を確認することにはなったのではないかと思う。

ドイツのバイオンテック社は、アメリカのファイザー社の協力を得てこのワクチンを生産した。大企業であるファイザー社の力を借りなければ治験を短期間で実施することはできなかったが、開発そのものはもちろん自社で行い、生産も基本的にはアメリカの会社の協力を借りなくても自力でできる条件は整っている、とバイオンテック社の創始者はあるオンラインのインタビューで語っている。

わたしが関心を持ったのは、この会社をつくり運営しているのがトルコ系移民、しかも夫婦であることだった。シュピーゲル誌によると、妻のテュレジの父親は一九七〇年代にイスタンブールからドイツにやって来て、地方の小病院で外科医として働いていたそうだ。生まれた娘はやがて医学を勉強することになる。

一方、夫のシャヒンがトルコからドイツに移住したのは四歳の時だった。父親は自動車工場で働いて家族を養った。シャヒンは医学を学んで医者になり、医学生のテュレジと出逢う。二人は結婚式の当日も研究室に行くほど研究熱心だった、というエピソードはあまり頻りに語られるので本人たちはもう聴きたくないそうだ。

二人は二〇〇一年に最初の会社をつくり、二〇〇八年にはライン川の流れる小さな町マインツにバイオンテック社をつくり、ずっと癌や感染症の治療にとりくんできた。

シャヒンは車を持たず、毎朝ジーパン姿で自転車通勤しているそうだ。今はEUだけで

なく何十カ国から注文を受けて多額のお金流れ込んできているが、最近は株価の動向なども気になるのかという記者の質問に対しては、科学者がトップに立つ企業なのであくまで一番の目的は研究で、今回のワクチンで得た多額の利益も次の研究の費用に充てていきたい、と淡々と答えていた。

それにしてもこの夫婦は、自分たちがトルコ系移民であることをどう見ているのか。同じくドイツに移住し生活しているわたしはそのへんが知りたかった。ドイツのマスコミは、移民がドイツ社会にどれだけ大きな利益をもたらすかを証明する模範例としてこの夫婦を誉（ほ）め称（た）えているように見えるふしもあるが、本人たちは「移民」というカテゴリーで世の中を見てはいないようで、たとえばバイオンテック社の社員も六〇カ国以上から来ているので、移民であることはあまりにも「普通」である、と語っている。「ドイツ人」対「トルコ人」、「ドイツ人」対「移民」などの二項対立の考え方はしていない。ただ、自分たちの成功物語をドイツで暮らすたくさんのトルコ系移民の良質なインスピレーションにしなければならないという責任は感じているとテュレジは語っている。又、夫婦で会社を経営することについては、二人は常に同じ目線で向き合い、私情を交えず、理性的に議論することを心がけている、と話していた。

地方の小さな町にしっかり根をおろし、いろいろな国で育った人たちといっしょに仕事をし、最終的には地球全体の役に立つように活動する。もしかしたら、それはパンデミックが見せてくれた一つの未来のビジョンなのかもしれない。

(2021年1月26日 朝日新聞)

◆多和田葉子 小説家・詩人。ベルリン在住